



シニアライフアドバイザー
松本すみ子

南アリア代表、NPO法人シニアわーくすRyoma 21理事。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団塊・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。著書に「地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア」（東京法令出版）など。

日本の伝統文化を知りたいという外国人も大勢来るに違いない。そういう外国人に囲碁の素晴らしさを教えたいのだ。それには英語が必要だと一念発起、昨年から英会話を学び始めた。

最近、小池東京都知事と語る東京フォーラム「ボランティアについて知事と語ろう！」というイベントで参加者を募集しているのを知った。ダメもとで応募してみた。当選。小池さんに直接質問できる5人に入ったので、東京五輪会場に日本の伝統文化を紹介する



英語の先生も囲碁は生徒と一緒に学びます

コーナーと囲碁のブースを設営してほしいと訴えたそう。

取材した日は、月に1度、小学校で料理、踊り、太鼓、英語、サッカーなどの活動を行う「ウィークエンドスクール」の日。囲碁教室は2時間を10回で教えていて、この日がこのクラスの修了日だっ

好奇心は止まることなく

若いから好奇心が旺盛だとは限らないが、逆に好奇心が旺盛であれば、若々しさを保つことができているのではないだろうか。大町さんを見ていると、そう思えてくる。

囲碁を教えるといっても、当日だけ活動すればいいというものではない。学校や施設などの関係者との調整、準備と段取り、保護者との打合せなど、実施までの仕事は多岐にわたり、時間もかかる。仕事とボランティアの両立でストレスがたまっていたとき、奥さんから「そんなに忙しいのならボランティアを止めなさい」と言われたそう。

しかし、ボランティアがあるから仕事ができているのだと、止めなかった。そして今、仕事は辞めたが、ボランティアは残った。そこには、仕事とは違う喜びや満足

た。大町さんを含めて講師が3人、PTAからのスタッフが2人、子供が7人、アメリカ人1人が参加していた。

このアメリカ人は小学校の英会話の先生。囲碁に興味を持ち子供たちと一緒に学びはじめた。今では、それなりの腕前。外国人に教

感があるのだろう。

「囲碁のことは何も知らない子どもたちが、ひとつ一つ吸収していく様子に感動するし、子どもの感受性の豊かさにも感心します。そんなときが、自分自身も一番情熱的になるときです」。

とはいえ、昨年、長年苦勞をともししてきた奥さんが体調を崩し、入院や手術をするなど、老々介護の生活が始まった。「残りの人生を妻のために捧げたい」と語る。奥さんには、オリンピック会場の囲碁コーナーで、外国人観光客に囲碁を教えている自分の姿を見届けてほしい。だから、それまで元気でいてと願う。

18年間続けてきた「ホタルの碁」もメンバーの高齢化が進んだので、次の引き受け手を探しているが、なかなか難しい。活動開始から20

えることの第一歩は一応達成したようだ。「でも、英会話はまだまだで……」と笑った。

午後には別の小学校で囲碁講座の予定があるとか。急いでお昼を食べると、いそいそと小学校の門の中に消えていった。その後ろ姿はとてども81歳には見えない。

周年であり、東京オリンピック・パラリンピック開催の年でもある2020年までは頑張っ続けて続けるが、その後は解散することを仲間にも宣言したそう。

また、囲碁の恩師の木村さんが亡くなり、自分自身も81歳を迎えた。いよいよ自身の「終活」からも逃れられないと少し弱気だ。

しかし、取材後、嬉しい出来事がありましたというメールが届いた。中学校PTAの幹事から「私たちのグループに囲碁を教えていただけませんか」と依頼があったというのだ。「来年からボツボツ囲碁教室を縮小しなければと考えていたのですが、会ってお話を聞くことにしました」。メールの文字の向こうから、大町さんの弾んだ声が聞こえてくるような気がした。